

【ポスター発表】

在宅療養高齢者に対する居宅介護支援・訪問介護・訪問看護の トランディシプリナリーアプローチ実践に関する研究(1)

—仕事の環境の実態—

○原田 由美子 (京都女子大学非常勤講師・6076)

梅花女子大学 綾部貴子 (3308)・松井 妙子 (香川大学・3306)、

キーワード：トランディシプリナリーアプローチ・仕事の環境・在宅高齢者

1. 研究目的

本研究では、訪問看護事業所の訪問看護職(訪看)、訪問介護事業所のサービス提供責任者(サ責) 居宅介護支援事業所の介護支援専門員(CM) の三職種によるトランスディシプリナリーアプローチ実践における彼らの仕事の環境の実態を明らかにする。

2. 研究の視点および方法

調査の対象は、CM、サ責、訪看である。対象者の抽出方法は、47 都道府県から無作為抽出した 24 都道府県で WAMNET に登録されている居宅介護支援事業所、訪問介護事業所、訪問看護事業所各事業所 800 か所の計 2400 か所を無作為抽出し、各事業所の調査対象者 1 名に回答を依頼する郵送調査を実施、自記式調査とした。調査期間は、平成 27 年 3 月 20 日～4 月 20 日であった。分析対象数を 602 名(有効回収率 25.1%)とした。調査項目は、「性別」、「年齢」、「在宅療養高齢者を中心とした居宅介護支援、訪問介護、訪問看護の三職種によるチーム活動経験の有無」、「チームアプローチやチームワーク、連携などに関わる職場外研修受講の有無」、「仕事の環境」、「訪看、サ責、CM の三職種によるトランスディシプリナリーアプローチ実践」を設定した。「仕事の環境」は、先行研究より「1. 職場での人間関係は、全体としてうまくいっている」「2. 上司は、私が仕事上の問題で困っているとき、相談にのってくれる」「3. 同僚は、私が仕事上の問題で困っているとき、相談にのってくれる」「4. あなたの職場は他職種・他機関との連携を重要と考えている」「5. 私の給料は、仕事の量や成果と釣り合いがとれている」「6. 残業手当など、諸手当が十分である」「7. 利用者情報を他職種に伝える時間がある」「8. 利用者情報を他職種と共有する余裕がある」「9. 職場では、連携やチームアプローチに対して価値観をおいている」「10. 利用者・家族とおおむね良好な関係を築けている」「11. 利用者・家族から信頼されている」「12. 利用者・家族からよく相談を受ける」の 12 項目を選定した。各項目に対する回答選択肢には、「1. 全くそう思わない」から「5. とてもそう思う」の 5 段階を設定した。

分析方法は、「仕事の環境」の実態を把握するために、「仕事の環境」12 項目に対して項目分析と探索的因子分析を実施した。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、香川大学医学部倫理委員会にて承認を得て実施した。対象者に、研究の趣旨や匿名性の確保、データの管理方法を文書で説明した。

4. 研究結果

項目分析と探索的因子分析の結果、5項目が除外され、第1因子<利用者本人や家族との肯定的関係>、第2因子<連携時間の確保>、第3因子<報酬への満足>の3因子7項目が抽出された。第1因子<利用者本人や家族との肯定的関係>は、「10.利用者・家族とおおむね良好な関係を築けている」「11.利用者・家族から信頼されている」「12.利用者・家族からよく相談を受ける」の3項目、第2因子<連携時間の確保>は、「7.利用者情報を他職種に伝える時間がある」「8.利用者情報を他職種と共有する余裕がある」の2項目、第3因子<報酬への満足>は、「5.私の給料は、仕事の量や成果と釣り合いがとれている」「6.残業手当など、諸手当が十分である」の2項目でそれぞれ構成された。各因子の信頼性 α 係数は、第1因子が0.85、第2因子が0.86、第3因子が0.69であった。各因子の平均値は、第1因子が4.11、第2因子が3.62、第3因子が3.05であった。

5. 考察

第1因子<利用者本人や家族との肯定的関係>の平均値が4.11という結果から、調査の対象のCM、サ責、訪看は、福祉、医療の分野における専門職としての仕事を遂行するうえで何よりも利用者や家族との信頼に応え、利用者が満足する生活の質の向上を目指しており、利用者本人や家族との良好な関係や信頼関係の構築していくことの重要視していることから、第1因子に抽出されたと推察される。

第2因子<連携時間の確保>について、三職種は相互の連携が重要な業務であると承認されている職場環境で仕事を担っていることからメンバーに伝えたり情報の共有が可能となり、因子として抽出されたと考える。

第3因子<報酬への満足>の平均値は3.05と他の2因子に比べて低い結果であった。専門職としての職業倫理、職務遂行上の満足度といった三職種はアイデンティティの確立が価値を持つ職種であると一般的に認識されている職種であり、調査対象である三職種も、そのように認識していると考えられる。しかし、三職種の実践は、利用者本人や家族の生活の質の向上や生命を守る職務に資する実践であり、専門性や職務の責任の重大さと実践状況に、十分に見合っているとまでは言えないと認識していることがみてとれる。

なお、本研究は、平成25年～27年度科学研究費「在宅療養高齢者に対する生活の質向上のためのチームアプローチ自己評価指標の開発（課題番号25463552）」の成果の一部である。